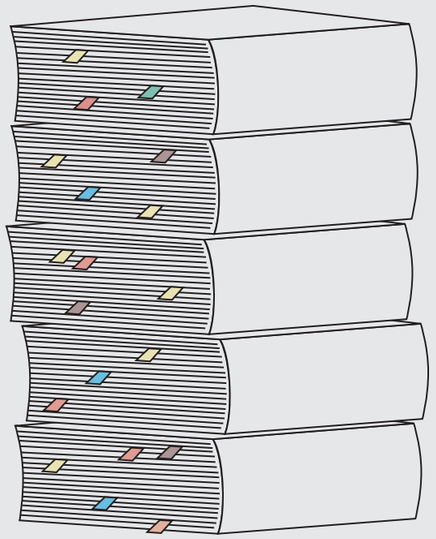
図書館學

昭和女子大学図書館学課程ニューズレター

Newsletter



図書館の仕事

2023 00

[DESIGN 鷲野宏デザイン事務所]

自治体の図書館で働くということ

日野市立図書館　市政図書室
清水ゆかり

はじめに

図書館学を学んでいる皆さんの卒業後の進路で、「自治体の図書館で司書として働く」ことも選択肢の一つであると思います。

私は、東京の郊外にある「日野市」という自治体が運営する図書館で働いています。大学時代、近世地方史を専攻した私は日野市周辺のいわゆる多摩地域をフィールドに、卒業論文をまとめるため、多摩地域の図書館や博物館を頻繁に利用しました。そこで働く司書や学芸員に資料の相談にのってもらい、レファレンスサービスの魅力を知り、「まちの図書館で働きたい!」と思うようになりました。

就職先に日野市を選んだ理由は、地域・行政資料の専門図書館「市政図書室」を設置していたことです。大学時代に利用した図書館の中でも特に、豊富な地域資料、一般の流通ルートに乗らないような出版物が書架のあちこちに並んでいたことや利用者満足度の高い職員のレファレンス力に強く惹かれました。

日野市の職員になって

最初の配属先は、企画財政部の企画課でした。市の総合計画の立案や市長直結の施策、統計調査、市史編さんなどを担当する部署です。私は統計調査や総合統計書の編集を6年間担当しました。

図書館で働きたい!という熱い思いを抱いて就職しましたが、当時の日野市の図書館は分館の建設ラッシュが終わり、新たな職員の採用や配置はありませんでした。統計書の編集に必要な資料を求めて、市役所の1階にある「市政図書室」をよく利用しました。利用者の立場・目線で日野市の図書館サービスを見つめる機会になりました。

企画課で先輩から学んだことの一つに、財務や文書作成などの「自治体職員としての基礎」を最初にしっかり身に着けることの重要性があります。自治体の施策や事業は、企画を立て「決裁」を取り、「予算」に基づいて実施します。市民へのお知らせや通知も、市民の立場に立ってわかりやすい言葉で書くことが大切です。当然、図書館の職員も財務や文書作成の知識・能力が必要になります。条例や規則など法務の知識も必要です。

企画課で勤務する間に、自治体職員としての基礎を身に着け、各部署がどんな仕事をしているのかを知ることができたことが、後に図書館で働くようになってからも大いに役立ちました。

図書館に異動して

中央図書館の貸出・レファレンス担当として、窓口サービスや成人書の蔵書管理を担当しました。日野市には中央図書館の他に六つの分館（地域館）があります。分館の業務は窓口サービスが中心ですが、中央図書館には移動図書館や障害者サービスの事務局もありますし、全館の予算の管理などを担当する部署（庶務）もあります。全館の購入資料を中央図書館で集約して発注し受入・装備作業を行っています。最初に、図書館の仕事の全体を俯瞰できたことは、図書館司書としてスタートする上で、とても有益な経験でした。

分館は、利用者との距離感が近く、子どもから高齢者まで様々な年齢層の方が来館します。図書館を自宅の延長線、「茶の間」のように感じて、毎日いらして下さる利用者もいます。利用者の声、地域住民の声を聴く機会も多く、地域によって様々なニーズがあり、選書や資料収集、展示などの企画に活かしています。

中央図書館や分館、移動図書館「ひまわり号」の乗務など多様な業務の経験を積むことが、職員としての成長につながります。

市政図書室の開設

市政図書室は、日野市立図書館のネットワークの中の分館で、地域・行政資料の専門図書館です。市役所の本庁舎の1階に設置されています。1977（昭和52）年に、現在の市役所本庁舎が移転・新築されるにあたり、市が各課に対し、新庁舎にどんな機能を入れたいかの提案を募りました。図書館も、「新庁舎建設計画に関する要望書」を提出しました。「新庁舎の建設にともない、市政資料の集中管理とサービスの大幅な改善を図る必要があり、そのために図書館（分館）を設置されるよう要望する」というものです。

「設置の理由」として、下記の４点を挙げています。

・市政資料の集中管理と運用の改善
・市議会議員に対するサービスの改善
・行政部局職員の資料利用面における改善
・一般市民に対する市政資料のサービス

それまでは各課が購入していた業務に必要な法令集やハンドブック、新聞などを市政図書室が集中管理することで、市の職員だけでなく、市民や市議会議員も同じように利用できるようにし、行政に関することや地域に関することのレファレンスサービスを行うものです。提案が採用され、1977（昭和52）年12月、市政図書室が設置され、本格的な地域・行政資料サービスを開始しました。

市政図書室を担当して

1995（平成7）年、かねてからの希望が叶い、市政図書室を担当することになりました。職員３名の小規模な図書室で、地域資料も行政資料もオールマイティーに対応できる知識を持つ人材が求められていました。大学時代に多摩地域をフィールドに近世地方史を専攻しましたが、それだけの知識や情報ではとても足りません。日野市や近隣地域で開かれる郷土史の講座に参加して知識を増やすことに努めました。講座で知り合った地元の郷土史家の皆さんから情報をいただいたり、レファレンスに協力していただいたりする関係性が築けたことがとても心強いものになりました。

担当業務は資料の収集、寄贈依頼でした。地域資料・行政資料ともに刊行情報を把握するのが大変でした。郷土史分野、地方自治分野の雑誌に目を通すこと、新聞の多摩地域版の記事や自治体の広報紙などを丹念にチェックすることを繰り返し、購入や寄贈依頼を行いました。国や東京都、区市町村の刊行物は「非売品」が多く、発行部署に電話で交渉することや、寄贈依頼文を送ることで入手できるものもあり、蔵書を増やしていきました。現在は、自治体刊行物もペーパーレス化が進み、データでの収集をどこまで網羅的に行うかが業務上の課題になっています。

市政図書室の特徴的なサービス

市役所の中に図書館が設置されている自治体は少なく、地域・行政資料サービスに特化した館は全国的に見ても珍しい存在です。自治体の行政資料・情報を提供する行政資料室や情報公開コーナーは、首長部局の総務課や情報政策課が管理運営しているケースが多いですが、日野市はその役割を図書館が担うことで、司書による資料提供やレファレンスサービスを実施することができました。

資料の相談を受けて調査を行い、日野市の図書館に無い資料も図書館のネットワークを活用して提供できることが強みです。日野市が作成し有償頒布する資料も、市政図書室が集中販売しています。市の職員が業務を行う上で参考になる新聞記事を毎朝コピーし、「新聞記事速報」（A3サイズで2頁・両面印刷）にまとめ、全部の課に配布して、全職員に回覧し情報共有しています。このサービスは新聞社の記事使用の著作権許諾を得て行っています。

庁舎内には「議会図書室」も設置されていますが、多くの議員が市政図書室の資料を利用し、司書によるレファレンスサービスを活用しています。専任の職員＝司書が常駐していることは、サービスを行う上でも利用者にとっても大きな意味があると思います。市役所の中に図書館があることが、市民や議員、市の職員にとって、図書館を身近な存在として、仕事や地域の課題解決に役立つ存在として捉えてもらえるよう、利用者のニーズの把握に努め、日々のサービスを充実させていくことを常に意識して働いています。市政図書室は、「自治体の図書館で働くということ」を常に意識する場と言えます。

地域・行政資料の担当者として

サービスを充実させ、利用者の期待に応えるには、図書館について詳しいだけでなく、自治体職員として市全体を俯瞰する広い視野と情報力が必要です。地域の歴史や現状、自治体が目指していることや取り組み課題を知ること、そのために地域を歩き、住民と話し、他課の職員から情報を集める、地域・行政資料担当者として私が常に心掛けていることです。多くの人と「話す」こと、「話を聴く」ことが重要です。

私は、市の職員の中から「キーマン」を決めて、情報を得たり、市政図書室のサービスについて率直な感想を教えてもらったりしています。まちづくりの分野はこの人、企画部門はこの人、福祉部門はこの人というように。アドバイスをお願いすることもあります。多くの人とコミュニケーションをとることが、サービスの改善や自身の「行政感覚」を磨くことに役立っています。

近隣自治体の地域資料担当者との交流も大切にしています。担当者会や研修会に積極的に参加し、顔見知りを増やし、課題を相談したり、レファレンスに協力してもらう関係を築いてきました。担当を離れた仲間とも、今でも親しく交流しています。地域の郷土史家とは、資料の相談にのるだけでなく、レファレンスに協力してもらったり、私家版の資料なども寄贈してもらえるような関係を作っておくと心強いです。

今、取り組んでいること

大きな取り組みが二つあります。

一つは、「歴史的公文書のデジタル化」です。日野市は、歴史的公文書を確実に遺し、活用する体制が未整備です。必要性について全庁的なコンセンサスを得なければなりません。その課題提起になればという思いで、図書館と文化財行政を担当するふるさと文化財課が共同事業として政策提案したのが「歴史的公文書デジタル化事業」です。5か年計画の３年目ですが、これまでに、明治期から昭和期の議会会議録や市制施行時の祝賀行事等の公文書をデジタル化しました。次に取り組むのが、旧村役場時代の公文書です。図書館が借りていた倉庫の中で長い間保管日野市が持つ歴史的に重要な公文書の中のほんの一握りに過ぎませんが、日野市の公文書管理制度の確立につながるよう、精力的に取り組んでいます。

もう一つは、「姉妹都市の図書館」と連携した地域資料の情報発信の取り組みです。日野市は、2017（平成29）年に岩手県の紫波町と姉妹都市になりました。童謡「たきび」で知られる詩人の巽聖歌は、現在の紫波町に生まれ、後半生を日野市で過ごしました。巽聖歌が架け橋となり、日野市と紫波町は交流を進めています。

図書館同士も職員の交流や互いの刊行物の交換を活発に行っています。

2023（令和５）年は、巽聖歌の没後50年に当たりましたので、12月から市政図書室と紫波町図書館がコラボ展示を同時開催しました。現在も、巽聖歌に関する資料の収集などで情報交換や資料交換を続けています。互いの頑張りや工夫が、刺激や励みになっています。

最後に

自治体の図書館で働くということは、行政を知ること、自治体職員として必要な知識を身に着けることが必要ですが、地域の住民と直にふれあう職場で働くことでもあり、とてもやりがいのある仕事と私は思っています。

地域・行政資料サービスは、地道な資料収集というイメージがあるかもしれませんが、いろいろな人との交流が生まれ、デジタルアーカイブなどの新しい事業にも取り組める分野の仕事です。ぜひチャレンジしていただきたいと願っています。皆さんの中から、自治体の図書館で働こうと思う方が現れることを願っています。

清水 ゆかり　しみず ゆかり
1986（昭和61）年から日野市職員。市政図書室を約20年担当。 趣味は「旅に出ること」で、旅先で図書館を訪ねることも多く、真っ先に見るのは地域・行政資料コーナー。館内での配置や資料の品揃えに着目します。

Report

図書館学課程・授業紹介

情報サービス論

私は、情報リテラシー教育に関心をもったことから、大学図書館での勤務経験を経て図書館司書養成課程にかかわることになりました。この機会をいただきましたので、現在担当している科目のうち「情報サービス論」についてとりあげたいと思います。

「情報サービス論」では、図書館が担う情報サービスの意義や、情報サービスを提供するために必要な知識等について学びます。図書館の存在意義を問いかけることから授業をスタートし、図書館利用状況なども尋ねますが、図書館をどのようにとらえているかは人それぞれのようです。これはまさに、自分自身がどのように図書館とかかわってきたか、ということの影響が大きいのではないかと考えます。いってみれば、それまでの図書館にかかわる体験の蓄積が、ひとりひとりにとっての図書館像を育ててきたのでしょう。そこで、この科目では教科書に沿って知識としての理解を深めていくとともに、さまざまな課題やゲストスピーカーによる講演を通じて、体験と理解の幅を広げていく機会にしてもらいたいと考えています。

さまざまな授業での取り組みを通じても利用するであろう大学図書館についても、受講生の利用状況はまちまちのようです。自習スペースとしての利用が多く、情報資源や各種サービスの利用という面では控えめな印象です。数か月に一回程度しか行かない、地元の公立図書館の利用頻度のほうが高い、といった声があったこともありました。昭和女子大学図書館は、通常のガイダンス等の他に、音声付き動画での図書館案内やセルフラーニング教材の提供にも積極的に取り組まれていますので、それらも学習に取り込み、大学図書館をより活用することにつなげる機会になればと考えています。

その他、レファレンス・インタビューのロールプレイや、こどもの頃に読んだ本について記憶を頼りに探してみようという課題、図書館の蔵書の中から調べ物に使えておもしろい１点を選び紹介するという課題も設けています。図書館の情報サービス自体はもとより、参考図書コーナーにはあまり馴染みがないという受講生も少なくありません。自分事として取り組んでみる体験の中から学ぶことは、必ずしも効率的とはいえないものの、知識としての理解とかみ合っていけばこそ有意義といえます。また、インターネットを介し座してできることの増えた今日ゆえ、大学図書館や近隣の公立図書館に行って見てみること、実際に利用した体験があって、よりよく理解できるという面も重視したいと考えています。

ゲストスピーカー講演については以前にも本誌上で紹介の機会をいただきましたが、図書館・図書館員の実際等についてお話しをうかがうこととしています。受講生にとっては履修学期に一度の実施となるものの、履修生に限らず図書館学課程生に広く聴講を呼びかけることもあり、なるべく異なるタイプのゲストをお招きできるよう企画しています。たとえば、図書館は文系の職場というイメージが強いことから、今年度前期は理系の公立図書館、後期は理系の図書館員をテーマとしました。関係各方面のご協力により実現できていることに感謝しております。こうしたことを通じて、ひとりひとりの図書館に関するアンテナをより高く伸ばし、資格取得をめざすだけでなく、自らのために図書館とのかかわりを深めていく人が増えていくことを願ってやみません。

横谷 弘美　よこたに ひろみ
情報システム業界および大学図書館での勤務を経て、図書館司書養成科目ならびに司書教諭養成科目を担当する教員として活動。関心のあるテーマは、情報リテラシー教育、メタデータの組織化。現在、昭和女子大学では科目「情報サービス論」「情報サービス演習A」を担当。

人が生きた証としての図書館情報資源・博物館資料

私は 2022 年 4 月、本学歴史文化学科に着任いたしました。専門は日本近現代史で、普段は博物館の学芸員をしています。学卒後、大学図書館、専門図書館、学校図書館などを経てきたこともあり、2023 年度より図書館学課程で科目を担当させていただく運びとなりました。私が体験してきたことを通して、図書館等と「人」との関係を考えてみます。

はじめに、あまり図書館そのものに関係のない話題で恐縮ですが、私が研究を始めた経緯をお話ししたいと思います。私の専門は歴史学ですが、実は高校時代の歴史科目の成績はあまり良いほうではありませんでした。というのも私は暗記をするのが苦手だったため、テストでよい点を取ることはあまりなかったのです。また、漠然と現代史、特に日本国憲法の制定過程に興味を持っていましたが、高校時代の日本史の授業は、よくて第二次世界大戦終結まで、ひどいと太平洋戦争が始まるところで 3 学期末が終わる、ということも少なくありませんでした。そのため、大学で戦後史を学ぼうと歴史学科に進学しました。もっとも、憲法史を学ぶ関係で、第一志望は法学部法律学科だったのですが補欠合格で、法律学科でないなら歴史学科のほうがいいか、という消極的理由での進学だったのですが。

大学での学びは得るところも多く、結果としては現在の職業につながったのですが、当時はあまり深く考えず、大学院の博士前期課程を修了した段階でとりあえず就職しなくてはならない、自分に何ができるかと考え、学部時代に取得した司書資格を活用できるのではないか、と思い至りました。図書館業務代行業の会社の契約社員となり、大学図書館の閲覧係に配属されました。勤続年数は短かったものの大学図書館での勤務は、浅いながらも自分の研究者としての経験が役に立ち、また、自分にはあまり向いていないかと思っていた接客の側面も評価いただけて、非常に密度の高いものとなりました。

その後、専門図書館におけるアルバイト勤務を経て、学校図書館に携わることとなります。学校図書館での勤務はかねてから希望していましたが、私が就職活動をしていた 2000 年代時は「学校司書」という名称も法制化されておらず（2014 年の学校図書館法改正で明文化）、学校図書館における学校司書の必要性は、学校教育の中心にいらっしゃる方々にはまだまだ認知されていない状況でした。当時の学校図書館の職員配置は学校司書ではなく司書教諭を配置する、という認識が強かったように思います（1997 年の学校図書館法改正により 12 学級以上の学校に司書教諭必置となったことが背景）。しかしながら、特に図書館学課程の科目を履修されている皆さんはそうした認識を持たれたかと思いますが、図書館における業務は、図書館学という学問が成立している通り専門性があります。司書教諭はあくまでも基礎は「教諭」であり、図書館を使った授業をどう展開するかという教員立場での専門性です。もちろん、司書教諭科目では情報資源の分類について学びますが、実際の分類には、図書館司書科目の演習を経験していないと難しい側面はあるといえます。

そうしたなかご縁があり、私立の小学校立ち上げに際し学校図書館をつくるという、非常に貴重な経験をさせていただきました。資料の予算は工面してもらえたものの、一般的な公立校における図書館設備に準じた形とするには数年を要するため、それを人的サービスでカバーすることに努めました。幸い、児童や保護者の方々、教職員の皆さんにご評価いただけたようなので、少なからず役に立てたかと自負しています。

近年の日本の社会状況を考えると、これからは「人」が大事にされる必要があると考えます。それは、日本社会に存在する図書館や博物館にも当てはまります。その第一の部分としては図書館等で働く人に対する認識であり、安心して働ける環境づくりは、現在図書館業界の中心にいる人たちの最大で最後の課題であろうと思います。

そして、図書館情報資源や博物館資料は、何よりも「人」が生きた証であろうと、痛切に感じる今日この頃です。私が専門とする歴史学では、あまり王道ではないですが、人物を中心に扱う人物史というジャンルがあります。私が研究テーマとしてきた金森徳次郎という人物は、第一次吉田茂内閣の憲法担当国務大臣として、現行憲法である日本国憲法の制定に尽力した人物として知られますが、大臣辞任後は設立間もない国立国会図書館の初代館長として、図書館の発展にも寄与しました。私自身の興味関心は、こうした「人」に対するものであると、年を重ねるにつれて感じることが増えてきました。

一方、歴史的にものを見ると、そうした著名人にばかり目が行きがちな部分も否めません。しかしながら、たとえ著名でなくとも市井で生きてきた多くの人々の存在はやはり意識されるべきです。そうしたなかで大きな役割を果たすのが、図書館における地域資料であったり、博物館資料であったりするといえるでしょう。日々業務にあたるなかで思うのは、情報資源や資料は「人が残す努力をしないと残らない」ということです。特に図書館は、人と情報資源を結びつける役割を担っているわけですが、その役割は、最終的にはやはり「人」にしかできないものであると、私は考えます。過去の人々が生きた証として残った情報資源や資料を、残す努力をする人がいて、後世の人に伝わる。その橋渡しとしての役割が、まさに司書であり学芸員でありアーキビストであるといえます。

2020 年の新型コロナウィルス感染症の流行によって、図書館や博物館・美術館などは休館を余儀なくされました。たしかに、生命の危機が迫った時、文化は不要・不急かもしれません。しかしながら、厳しい状況であっても、文化によって心が豊かになる、生きる活力が生まれるものだとすれば、文化こそが人間らしさであり、決して不要なものではないはずです。もちろん、人間のできることには限りはありますが、有限だからこそできる範囲で人々の思いをつないでいく、それが司書や学芸員、アーキビストの究極の使命であると考え、そのような思いで授業を担当しています。

霜村 光寿　しもむら みつとし
専門分野は日本近現代史。大学図書館、専門図書館、学校図書館の勤務を経て、現在は博物館の学芸員として活動。学生時代の研究テーマは主に政治史（憲法史）だったが、近年は主に地域の文化史（スポーツ史など）に関する研究を進めている。

司書教諭の資格取得を通して、これからの時代に必要な資質・能力を身につけよう

昭和女子大学では、卒業単位外ですが、司書教諭資格取得のために5科目（１０単位）を履修することができます。そのうち、「学習指導と学校図書館」「学校経営と学校図書館」「情報メディアの活用」「読書と豊かな人間性」の4科目を担当しています。

皆さんが生まれる少し前、２０世紀から２１世紀に変わる頃、学校では、総合的な学習の時間という科目が新設されました。問いを解決するとともに、自分はどんなことに興味があるのか、どういう価値観をもっているのかなど、自分の生き方にも目を向けていく科目です。問いを解決していくためには、調べることが必要になります。そこで、児童生徒にとって身近な学校図書館の整備が始まりました。司書教諭は校内の旗振り役として、図書館と児童生徒・先生方、図書館資料と授業をつなぐ仕事をしていました。その時に必要な知識及び技能を、資格取得時に学んでいたのです。しかし、情報社会の進展に伴い、学校図書館で扱う「情報」も変化しています。司書教諭には、一教員として必要な知識・技能に加え、情報活用能力育成の視点、教科横断的・総合的な視点、マネジメントしていく視点なども必要になってきました。

現在、履修している学生さんの多くは、将来、学校現場に関わりたいとの思いがあります。そのため、１５回の授業を組み立てるにあたり、どの科目でも意識していることをいくつか紹介します。

一つ目は、学校現場の今を伝えることです。私は小中高等学校での教員・司書教諭を歴任してきました。この経歴を生かし、学校図書館を活用することを通して、どういう学習活動や読書活動が行われているのかを、現場での事例をもとに、授業の組み立て、学校司書との連携などを視野に入れて紹介しています。合わせて、教員は教科を担当すると共に、学校内の多様な業務を役割分担しています。司書教諭が学校現場において、どういう役割を担っているのかも伝えています。

二つ目は、演習をできる限り取り入れることです。教科にはねらいがあり、単元計画に当てられる授業時間は、非常にタイトです。そこに、情報や読書に関する学習活動を取り入れるには、それらの良さや必要性の体験が鍵になると考えています。言語活動の場としての図書館活用、情報メディアの種類と活用の仕方、多様な読書活動の生かし方など、学校図書館を活用した授業の今を　演習を交えて学ぶ時間を可能な限り設定しています。

三つ目は、情報と言えば、インターネットが既に日常的になっています。学校でもGIGAスクール構想により、一人１台のタブレットが当たり前になってきました。今や児童生徒は、左手には図書館資料、右手にはタブレットと、両手に情報を得るツールを持っています。しかし、いずれも、情報を得るためには使えても、考えを作ってはくれません。考えを導き出すのは自分自身であることを、学生自身がこれらの科目を通して学び、学校現場で児童生徒に出会った時に生かしてほしいと、願っています。

このように、学校図書館を切り口にした科目を担当していますが、資格取得のための学びを通して、教科横断的総合的な視点をもち、これからの時代に必要な資質・能力の育成に携わる教員として成長できる種まきの時間にしたいと考えております。

塩谷 京子　しおや きょうこ
放送大学客員准教授、昭和女子大学非常勤講師、静岡県公立小学校教諭／司書教諭、関西大学初等部（中高等部兼務）専任教諭／司書教諭を経て現職。関西大学総合情報学研究科博士課程後期修了　博士（情報学）

大学図書館にコンピュータがやってきた！

日本語日本文学科所属の准教授の田中均です。図書館学課程では、生涯学習概論や情報資源組織論などいくつかの科目を担当していますが、今回は図書館情報技術論に関わる昔話しをしてみたいと思います。私が大学図書館で司書をしていた頃、年代は1990年半ばから2000年頃の話になります。

その頃は大学図書館へのコンピュータ機器の導入の第2期に入った時期（＊私の独断偏見定義で）でした。当時は若い司書、特に男性は「若いんだからコンピュータぐらい大丈夫だよね」と、慣れないIT系の業務を押しつけられがちな時代でした。私の同僚はiMac（超格好いい一体型デスクトップPCの名器）を持っていたというだけの理由で、図書館システムがインストールされたIBM製のメインフレーム機の管理を任されていました。高さ2mぐらいの巨大冷蔵庫のような大きさで、電源スイッチが長さが30㎝近くもある回転式ハンドル式のマシンでした。

1992年に実用性のあるWindowsの最初のバージョンとしてWindows 3.1が発売されますが、ほとんどは業務用として利用されていました。図書館にも導入されましたが、インターネット登場以前のためオンラインではなく、国立国会図書館のJ-BISC、青山大学図書館のCD-ROM版AURORA、法令・判例検索サービスなどをＣD-ROMを使ってカウンターで代行検索していました。唯一の例外が「国立国文学研究所」のデータベースでした、電話回線を使ってアナログでダイヤルアップ接続していました。

PCごとにOSや周辺機器が異なり、ソフトウェアごとに操作方法がまるで異なっているのが当たり前で、プリンターの共有もできない事が多く、マウスが使えないPCやソフトも普通にありました。良くてプルダウンメニューからの選択式、最悪はキーボードからコマンドの手打ちでの操作です。検索を実行させるのに使用するコマンドも色々と混在していて「search」だったり「start」だったり、「run」も有ったかな？　違いの主な要因は導入時期の差です。1年新しいと見違えるように性能が上がる時代でした。

仕様の異なる多種多様なPCが混在してやっかいな上に、ソフトの利用者用マニュアルはメーカー標準が難しすぎるので図書館職員が個別に用意していました。当然にカウンター職員は全て使用できて、説明できなければなりません。

1995年になると日本でもインターネットの商用利用がはじまり、一年後のWindows95 SP1の発売から一般に急速に広まっていきます。普通の大学生が続々とPCを買い、インターネットをはじめます。当然のように大学図書館も導入しました。最初は遅くて使い物にならなかったのに、見る見るうちに使えるサイトやサービスが増え、データベースがオンライン利用となり、大学図書館はホームページを持ち、OPACはインターネット経由のWebOPACが当たり前になりました。見る見るうちに便利になっていったのですよ。

現在、異なるデバイスであってもUSBやHDMIケーブルで大抵のものがつながります。これがどんなに恵まれた環境なのか、皆さんにはちょっと想像しづらいと思います。しかし、今後AIがどんどん身近なものとなり、「情報検索」が昔の言葉になった頃、皆さんも「自分が大学生だった頃は面倒くさかったなぁ」とふり返るのではないかと思います。楽しみですね。

田中 均　たなか ひとし
鹿児島出身。大学図書館司書をへて現職。小中は学校図書館に入り浸り、高校で自転車通学になると下校時に本屋に入り浸り（立ち読み専門）、そのうちパソコンが発売されるが、お金が無いため買えず、やむなく自作に走る。図書館にパソコンが導入されると「好きなもの二つが揃っている！」と就職、そのまま今に至る。

司書資格を活かして働く先輩からの

message

本が好き。本に囲まれて仕事がしたい。司書に憧れたのは、学校の図書室と区立図書館しか知らない高校生の頃でした。

大学卒業後は図書のデータを扱う企業に就職しました。そこで専門図書館や企業内資料室の仕事に携わり、図書館のイメージが大きく変わりました。国際交流、医学、美術など、専門分野に特化した個性的なライブラリー。所蔵品は本以外にも、統計、パンフレット、博物館並みの資料まで様々でした。

一般公開されない企業の資料室では、司書の知識よりも先に業務や社内のニーズを把握することが大切です。レファレンスの前段階として、独自分類や配置等の工夫が求められました。

松本 紫乃　まつもとしの
日本文学科卒業後、IT系企業に就職。紙のカードだった目録情報をデータに移行する時代だったため、都立、大学、専門図書館等の電算化業務に携わる。夢はニューヨーク公共図書館に行くこと。

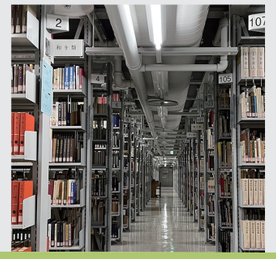
資料があればそれを必要とする人がいて、的確に情報を届けることは、大きな図書館だけではなかったのです。

今でも本のある場所は大好きです。先日、富山で訪れた硝子美術館の隣には市立図書館が併設されていて、近くにいたら毎日でも行きたいような素敵な空間でした。

時代や状況と共に図書館も変化していきます。学生の皆さんも今、持っている情報やイメージだけで自分の未来を限定せず多くの可能性に手を伸ばしてもらいたいと思います。

＊富山硝子美術館　富山市立図書館　隈研吾設計

司書資格を活かす



私が司書課程を学んでから十数年経ちますが、意外なことに図書館の検索ツールの基本はさほど変わっていません。

司書の勉強をされている方は、パソコンが普及していなかった時代に図書館のレファレンスサービスを支えてきた目録カードの存在をご存じかと思いますが、現在の図書館の検索システム（オンライン蔵書目録 Online Public Access Catalog ）は目録カードの仕組みが基盤となっており、その特徴の一つとして入力する単語の正確性が求められます。例えば三浦しをん著『舟を編む』を検索する際に、『舟 ‘で’ 編む』と誤入力するとヒットしないので、「てにをは」を入力せずに「舟」と「編む」や「舟」と「三浦しをん」等と AND 検索を使用して調べます。AND 検索は Google だとスペースキーひとつで事足りるため、情報サービス論を学んだ当時は何に必要なのか疑問でしたが、図書館の検索システムを使いこなす上ではとても大事な要素でした。

このように図書館でいざ働いてみると、司書課程で学んだことの理解が深まり、いまでも利用者にレファレンスサービスを提供する上で非常に役に立っております。

長谷川 裕香　はせがわ ゆうか
世田谷区立下馬図書館司書。大学在学中に図書館でアルバイトをした経験から図書館司書を目指す。大学卒業後、大学図書館に勤務。その後、株式会社図書館流通センターに入社し、現在まで図書館司書として働いている。最近、近所のケーキ屋さんでなんとなく購入したシュークリームが大変美味しくて感激した。

From students

国立国会図書館体験記

今回の見学で初めて国会図書館を訪れました。閲覧室やカウンターなどから、普段みることのできない書庫まで、職員の方の詳しい説明を聞きながら見学するという貴重な体験ができました。中でも印象に残ったのは、雑誌の受付カウンターと、漫画雑誌の書庫です。国会図書館のような日本の図書館、文化の最先端でも、システム障害などが原因でアナログの取り寄せ用紙を使うことがあるのだなととても興味深かったです。また、昔購読していた漫画雑誌の背表紙を見ることができ、とても懐かしかったです。貴重な体験を、ありがとうございました。(I・T)

書庫に収められている漫画は、出版時のままの状態のものと、堅い表紙と背表紙を付け、製本し直したものと、箱詰めされているものがあることを学びました。特に箱詰めされた書物は、職員の監視下で利用することができるというお話が印象的でした。漫画は利用したい人が多いと思いますが、貴重な資料であるため、保存をしていかなければなりません。そのため、損傷の具合によっては、職員が利用様子を監視することが必要だと思われます。しかし、監視された状態で漫画を読むのは落ち着かないため、利用を控えるようなるのではないでしょうか。さらに、表紙と背表紙を新たに付けると、背表紙が見えなくなってしまうと知り、利用が多い書物の利用と保存の両立は難しいと改めて感じました。(S・S)

国立国会図書館に訪れたことはあるが今回は地下書庫まで見学することができ、非常に貴重な体験をすることができた。地下書庫では私たちが懐かしいと感じる幼い頃に刊行された雑誌を直接見ることができ、また地下にも関わらず日の光が入ってくる光の庭は閉鎖的な空間であるはずだが開放的な気持ちにさせる空間でもあった。職員の方々が忙しなく移動や業務を行う姿を見て、日本一の図書館の管理維持の大変さを目に見えて知ることができ、とても有意義な見学をすることができた。(K・N)

国立国会図書館は今まで名前を聞いたことがあるだけで初めて訪れたのですが私の知っている図書館とは規模も仕組みも異なりとても圧倒されました。各分野によって閲覧室が分かれていたり、書庫には明治時代に発行された新聞が保存されていたりと、専門性の高い資料が所蔵されていて、それを日々扱っている司書職員の皆さんの凄さも同時に感じました。(A・S)

国立国会図書館について授業で日本国内で出版物すべての出版物を収集・保存しているのを聞いていましたが、今回の見学で身をもって実感しました。特に、明治時代や関東大震災の時に発刊された新聞を見た時は日本国内で出版物を収集・保存していることを感じました。関東大震災の時に発刊された新聞には被災地の現状を伝える写真や行方不明者の情報などが載っており当時インターネットがない当時の新聞の重要さを感じました。(T・H)

授業で勉強していた場所を実際に目で見ることが出来たためより学びが深まり記憶に残すことができました。今までは本当に国内で出版された全ての本があるのかと思っていましたが、施設を見たり説明を聞いたりするなかで「本当に全ての本があるんだ」と納得出来ました。見学を経て、私も国立国会図書館で本を読みたいと思ったので後日会員登録をして図書カードを作りました。司書を志す者として図書館を実際に見て学ぶということを忘れずにいたいです。
(島倉みさき/日本語日本文学科2年)

今まで行ったことは無く、初めて行く場所でした。大きい施設なのに本が閲覧者が手に持っている分しか見られないのは新鮮でした。滅多に入れない書庫では、漫画や雑誌の初版や絶版本を見ることが出来て楽しかったです。本の所蔵だけでなく、レファレンスサービスの豊富さが凄いなと感じました。各分野に精通する専門家をブースに置いたり、コピーや複写をするサービスや、本を取り寄せする場所など、利用者が直ぐに本を手にできるように効率の良い方法をしていたのが印象的でした。国立国会図書館は日本の歴史や文化を守るだけでなく、多くの人に利用してもらう二つの役割を多くの図書館の手本として存在しているのだなと感じました。(本山かな㐂/歴史文化学科1年)

普段見ることができない明治・大正時代の新聞を実際に書庫室で見ることができました。明治38年の報知新聞の付録が昭和天皇が木馬に乗っている写真で、今までこのようなものは見たことがなかったので驚きました！普段は絶対に入ることのできない裏側を見ることができ、貴重な体験になりました。公立図書館や学校図書館の利用方法や役割の違いを自分の目で確かめて理解することができました。(I・A)

Report

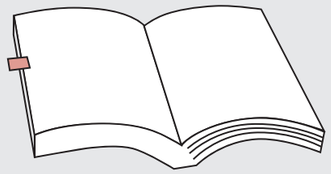
学んだことを活かして

図書館学課程支援準備室のしごと

図書館学課程支援準備室（3号館4階4S05B教室）をみなさんはご存じですか？この教室には、図書館学に関する書籍が配架されています。図書館学課程の先生方が、講義の準備をする部屋として使用しています。

2023年3月より図書館学課程の科目履修者の中からアルバイトを募集して、図書館学課程支援準備室の配架図書整備を行ってきました。具体的に、「配架書籍の目録データ入力」「配架図書のゾーニング」「図書ラベルの作成・貼り付け」「図書ラベルデータの入力」の業務をお願いしました。講義の中で学んだことをフルに活用しながら、学生同士で協力して業務にあたってくれました。学生にとって、実際の司書業務を疑似体験できる、実践的な学びの場となっていれば幸いです。

計59名のアルバイト学生のみなさん、ありがとうございました。



授業で学んだことをアルバイトのどのような場面で活用しましたか？

▶書籍のデータ構築をする際や
書籍に分類記号をつける際に、
書誌情報の確認方法と書き方、
日本十進分類法を学んだことが
役に立ちました。

▶外国の絵本の書誌情報は前にあるということ

▶まだ受けた授業が少ないので、
先輩に引っ張ってもらった場面も
多かったですが、書誌情報の見方などは
授業で学んだ事を活かせました。

▶授業の前にこのアルバイトを経験したため、
まだ学んだことを活かすというよりは
主にこれから学ぶことの先取り
というような形でした。

▶資料に分類番号を振る場面。

▶本の背に貼る請求記号を振るとき

難しかった作業は？

▶ワードの入力作業

▶その本に合った分類記号を探すこと。

▶大きな本を傷つけないように
分類記号シールを貼ること。

▶Excelに書籍情報を入力する際、担当者ごとに
入力書式に微妙な差があったりすると、
どこに書式を統一させるか困惑しました。

▶Excelに慣れていなかったので、
その使い方が難しかったです。

▶データを入力していく際にどこまでを
入力するべきなのかが曖昧になっていて、
どの書き方が正しいのかを調べることが
多々あり、時間がかかったことが
大変であったことではないかと思う。

▶多くの資料があったので、
どの資料の入力が終わっていて
どの資料が終わっていないのかが混ざって
同じ資料を入力しようとしてしまったり、
反対に飛ばしてしまってのちに
慌てて追加することがあったりしたことが
少し大変だった。

▶書籍のデータ構築をする際に、
何語で書かれているのか
判別がつかない本の書誌情報を探す作業が
難しかったです。
特に、その本の出版年が分からず、
出版年を探す作業に苦戦しました。

▶分類番号を付与する作業

▶請求記号を振ることはもちろん、
確認した本をPCに記入するとき。
確認した本の内容をPCに入力する作業は、
後々作業する人が困らないように
どれくらいの情報をふくめればよいのかの
塩梅が難しいと感じた。

参加してみたトータルな感想

▶実際に入力作業をやってみて
難しいと感じた。
4人で協力し合いながら、
作業を進めていきました。
私は1年生だったので、3、4年生の方に
優しく教えてもらいながら行いました。
終始雰囲気良く、居心地の良い環境で
作業ができ、楽しかったです。

▶普段交流する機会がない学生さん同士と
コミュニケーションを取れる、
良い機会だった。
授業で学んだことが活用することが
できて達成感があった。
実際にどのように分類するか
迷う場面もあったため
より勉強することが必要だと感じた。

▶司書課程を学んでいる人と
一緒に作業をすることで、
難しかった授業の乗り越え方や
おすすめの授業の取り方など、
司書課程の学びを進める上での
情報を話すことができました。
本好きな人が多いので、
本の話で盛り上がることもできて
楽しかったです。

▶授業では組織化について学んでいたが、
実際に手作業でリストを作成したり
するのはどうやって行うのかと体験を通し
て知ることができたのが良かった。

思っていた以上に資料の数があって、
すでに入力されたものとそうでないものが
若干混ざってしまって
確認をしながらでないと
二重に入力しかけてしまうことがあるため
時間がかかったように思う。

▶私は2回アルバイトに
参加させていただきました。
アルバイトでは、書籍のデータ構築や
整理、ラベル貼りなど複数の業務を
実践的に学ぶ機会となったため、
司書課程の学びを活かすことができ、
非常に勉強になりました。
ありがとうございました。

▶授業で習い、実習で行った
分類番号に関する作業を
実践できたのは非常に貴重な
経験となり面白かった。

▶司書課程での学びを
活かすことができたアルバイトだった。
勉強した内容を実践できるだけでなく
司書課程を履修している人との
交流も持つことができ、
且つ輸入にもなるので非常に良かった。
また機会があれば参加したい。

参加して学んだことは？

▶実際に図書館業務をやってみて
実習に向けて頑張ろうと思った。

▶分類記号の仕組み

▶書籍の用途によっては、
「一般的な分類」ではなく
「大学での分類」として扱う
ケースがありました。
同じ書籍でも、使用する施設のニーズ
によって分類が変わることを学びました。

▶授業で学んだことが活用できる場面と
例外となる場面があったので
臨機応変な対応が必要であること。

▶授業で学んだ書誌情報入力を
実際にやってみることで、
今まで座学でしか知らなかった司書の
仕事を少し体感することができました。

▶作業をしていた時にスムーズに進めていく
ためには会話を通じてコミュニケーションを
十分に取りながら、「この棚終わりました。
ここやります」など声をかけ合って
行うことが重要だと学んだ。
このことから、実際に現場で作業を
するとなっても、
各自で進めていく作業かもしれないが
しっかりと進捗を伝えたり、
分担したものが最終的に一つになるため、
一緒に行なっているという
意識を持つべきだと思った。

▶本学の図書館で行った
インターンシップの業務内容を
復習する機会にもなったため、
業務を早く正確に行う練習をすることができ、
非常に勉強になりました。

▶コピーカタロギングのありがたさ

▶請求記号を振る事の難しさ

▶本の整理には予想以上に
体力が必要だという事

図書館学課程DATA

司書資格取得者数・司書教諭単位修得者数

		令和2年度卒業生		令和3年度卒業生		令和4年度卒業生		令和5年度卒業生	
		司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※
人間文化学部	日本語日本文学科	33	2	41	2	23	6	20	2
	歴史文化学科	11	2	25	0	9	0	9	1
人間社会学部	心理学科	6	0	10	0	4	0	4	0
	福祉社会学科	4	0	0	0	0	0	0	0
	現代教養学科	7	0	13	0	4	1	6	0
	初等教育学科	0	6	1	12	0	11	2	8
生活科学部	環境デザイン学科	0	0	0	0	0	0	1	0
	健康デザイン学科	0	0	1	0	0	0	0	0
	管理栄養学科	0	0	0	0	0	0	0	0
	食安全マネジメント学科	1	0	1	0	0	0	2	0
グローバルビジネス学部	ビジネスデザイン学科	0	0	1	0	0	0	0	0
	会計ファイナンス学科	――	――	0	0	0	0	1	0
国際学部	英語コミュニケーション学科	1	0	2	1	0	0	5	0
	国際学科	0	0	0	0	0	0	0	0
合計人数		63	10	95	15	40	18	50	11
		R3.3.31時点		R4.3.16時点		R5.3.16時点		R6.3.16時点	

※司書教諭は、単位修得済みの資格取得見込者数。

図書館学課程科目履修者延べ人数※

		令和2年度履修生		令和3年度履修生		令和4年度履修生		令和5年度履修生	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
人間文化学部	日本語日本文学科	263	281	233	183	209	194	216	252
	歴史文化学科	134	117	136	70	96	110	77	128
人間社会学部	心理学科	54	52	51	36	35	35	44	38
	福祉社会学科	8	5	7	1	2	1	0	1
	現代教養学科	65	73	47	38	36	32	21	28
	初等教育学科	40	19	43	23	46	15	30	20
生活科学部	環境デザイン学科	3	0	13	6	9	6	7	3
	健康デザイン学科	1	3	0	2	0	2	2	3
	管理栄養学科	0	0	2	0	0	0	0	0
	食安全マネジメント学科	8	6	2	2	8	11	10	4
グローバルビジネス学部	ビジネスデザイン学科	4	4	5	0	2	7	6	13
	会計ファイナンス学科	0	0	4	3	6	8	6	10
国際学部	英語コミュニケーション学科	22	16	18	3	18	39	34	15
	国際学科	0	0	4	8	23	2	3	7
大学院		0	0	0	0	0	0	1	3
合計延べ人数		602	576	565	375	476	462	457	525

※ひとりが関係科目を２科目履修した場合は２名とカウント

「資格取得者数」「履修者延べ人数」共に昨年度と大幅な変化は見られなかった。ここ数年は減少傾向にあったため、その流れが止まったのはうれしいことであった。

本課程では、数々の履修者限定イベントを行っている。昨年度から開催している「和綴じ体験」「国際子ども図書館見学」などのイベントに加えて、今年度は「国立国会図書館見学」と「図書館学課程支援準備室アルバイト」も行った。「国立国会図書館見学」は、コロナの影響でしばらく見学を中止していた国立国会図書館が、今年度になり見学を再開したことで開催することができた。一般利用者が立ち入ることのできない書庫内を見られるなど貴重な体験ができる機会となった。「図書館学課程支援準備室アルバイト」では、もともと資料室としての役割を果たしていた支援準備室を、講義使用もできるような誰でも入室可能な部屋にするためにレイアウト変更などの整備を昨年度より進めてきた。それに伴い今年度に入ってからは、学生のアルバイトを募って配架整理をしてもらった。目録・分類ラベルの作成など、学生にとっては講義で学んだことを活かす場となった。

上記のようなイベントへ参加することで、楽しみながら司書業務への理解を深められていれば幸いだ。それによって資格取得に向けたモチベーションが高まることで、将来的に「資格取得者数」「履修者延べ人数」が増えるよう願うばかりである。

（飯村祐乃）

編集　池田美千絵　飯村祐乃　川口華織
デザイン　鷲野宏デザイン事務所
2024年3月31日発行（年1回発行）
昭和女子大学図書館学課程
東京都世田谷区太子堂1-7-57
昭和女子大学日本語日本文学科内